魏の戦いについて

丸に釘抜き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魏の戦いについて

【Ｎコード】
Ｎ１８８５Ｐ

【作者名】
丸に釘抜き

【あらすじ】
真・恋姫無双の魏ルートの戦いについて思ったことをかきました。小説ではないので、あらすじがありません。

（前書き）

この文章は小説でもなく、私個人のゲーム後の感想をもっとらしく書いただけのもです。魏ルートの話？ですが登場人物とセリフはほとんどありません。何となく軍事評論ぽくかきました。実際の私には軍事知識はほとんどありません。このことを踏まえ、よければお読みください。

魏の主導における三国同盟。

その原動力になったのは魏の将兵の汗と血である。（他国の将兵も同様である）

今回は最終局面である赤壁の戦いの後、蜀侵攻、三国同盟成立までを述べたい。

官渡の戦の後、河北四州を併呑、涼州を支配下において後背の憂いをたった後に孫呉に侵攻。

これに対し孫呉と蜀漢は同盟を成立、赤壁で迎え討つ形になる。この時点での兵力数は魏５０万、呉２５万

蜀２５万といわれている。赤壁の戦いは魏の勝利で終わり、魏軍は建業を目指し進軍を開始する。（赤壁の戦いについて三国史の戦いの中で一番有名であり、謎があり、考察や学説が数多くあるのでそちらを参考にして頂きたい。謎とは当時の味方、後世の人々までも全体の策が見渡せない周瑜の計略、そこを見破った曹操、三国史上最大の謎である。そして三国の帰趨決めた戦いでもある）

建業を目指し陸路を取った魏軍であるが、全軍を二つに分け進軍、夏候惇率いる先鋒軍、曹操率いる本軍。対する呉軍は建業に再集結し、魏軍に備えていた。兵力は魏３０万対呉２５万以外に兵力差に開きがないが、内実には開きがあった。呉は赤壁の後、なりふり構わず戦力をかき集めたが、南方の豪族や警備隊、再動員された兵力であり、戦意が乏しい豪族部隊、（豪族達の大部分が袁術から呉に乗り換えた者たちであり、呉の理想とする国作りに共鳴して配下になったものもいるが、ほとんどの豪族は領地の維持、政治力の維持、公平な豪族間のバランス調整を国に求めている。赤壁の戦いに敗れ

た呉は、武の力が衰えたため政治機構の崩壊の危険がある。豪族達は自分の領地の維持を第一とする為、力の衰えた国、勢力には従わない。魏、蜀の豪族達も同様である。これらの内政問題については別の機会に述べたい）

戦意はあるが、装備、訓練の劣る部隊。赤壁から引き上げた士気の落ちた部隊。通常ならば赤壁の戦いの後、瓦解してもおかしくなかった。何しろ呉随一智将周瑜の策を見破られ、呉の宿老の黄蓋は戦死し、士気は最低レベルであった。

魏は赤壁の戦いでは相手の策を見破り大きな損害を出さずに乗り切った。補給、その他の原因があったにせよ、すぐに追撃をかけるべきだった。水路を使い建業につけば、呉はすぐに瓦解したのではないか。呉の内実は上記の状態であったし。戦果を徹底するのは戦の常套である。しかし現実は陸路にて進撃をした。筆者もかつては水路利用し、短期に建業を目指すべきだったと思っていたが、当時の武将たちには当たり前のことを筆者が見落としていた蜀軍の存在である。蜀軍も赤壁の戦いの後、蜀に引き上げを開始していたが、赤壁の戦いでは大きな被害受けず、主力は健在。蜀主力の動向見極めてから、魏本軍の移動、先鋒軍の停止も納得がいく。しかし陸路の移動の為、呉に再編の時間を与えることになる。孫策をはじめ呉の首脳人は時間を無駄にせず軍の再編成をおえ魏軍に備えた。（士気を回復させ、豪族達を魏に走らせず、再集結させた孫策はまさにカリスマ、小覇王の名に恥じない統率力）このジレンマを魏軍は大して気にしていなかった。戦争とはそんなものと言ってしまえばそうなのだが、曹操の覇者としての器、それを支える魏軍の自信の表れである。

双方の準備が整い建業会戦が始まる。

戦いは曹操と孫策の舌戦から始まり、先鋒同志の激突、魏の先鋒は魏武の大剣夏候惇、対する呉は江東の小覇王孫策、先鋒から始ま

った戦いは両翼に広がり、一進一退を繰り返していたが、兵力に余裕のある魏軍は両翼を広げ呉軍を半包囲、別部隊を建業に向かわせ呉軍に動揺を走らせ、その隙に予備兵力を投入、呉軍の戦線を突破、包囲体制を完成させた。このまま完全勝利かと思われたが、呉軍の決死の突撃に包囲網を破られた。完全勝利はのがしたが、建業を落とし呉領の占領を決定づけた。しかし孫一族、将軍、兵士数万は蜀に亡命蜀侵攻時の苦戦の一因となる。

戦略的には呉領占領で目的を達成、政治的には孫策を始め、主な武将が生き残り呉領の奪還の旗印と大義名分が蜀にわたること、呉領に対する孫家の影響力が残ることを考えれば不完全勝利と言わざるを得ない。

建業会戦の後、呉領の占領政策と同時に蜀侵攻の為の軍の再編を時間をかけず終えた魏軍は蜀侵攻を開始する。大陸統一が第一目的、第二目的が呉領の支配権確立、時間をかけずに蜀に侵攻したのは蜀に呉領に対する影響力を排除したかったと思われる。

もともと魏の大戦略は涼州制圧後、蜀が北方に兵力を集め警戒してるからこそ呉制圧に乗り出した。

呉制圧で終わる作戦が蜀侵攻にふみきったのは、蜀の素早い兵力移動に刺激されたのと、先ほどものべたが孫一族が生き残ったことによる影響力がおおきかった。ただでさえ混乱している占領地で影響力を行使されれば大混乱が起きる。別に反乱が起きなくても民たち意図的に魏にたいしてサボタージュをおこせば、呉領の占領政策は破たんし、魏は身動きが取れなくなる。長期的にマイナスが大きくなるなば、今は呉に勝ち兵士の士気も高く、この勢いを持続したほうがいいと判断しとと思われる。

一方蜀も短期決戦を望んでいた節がある。孫策一同は外交カードにもなるし、自軍の強化にもつながるが、一歩間違えればすぐに不安定要素になりえる。（ただし劉備はどんな人物も受け入れられる度量と奥行きのある君主である。）また長期的視野でみれば魏が呉

領を把握すれば蜀の国力では魏に勝利することがほぼできなくなってしまう。お互いの目的が一致して魏と蜀の戦いがはじまった。

蜀の魏に対する戦略は地形の特徴を生かした一種の焦土戦略であったが、ナポレオンに対するロシア程徹底したものではなかった。蜀の理想とする政略面で、蜀内部の政治理力学の面（内政問題は別の機会に述べる）でも。それ故に徹底した焦土戦略は見送られた。しかも正面展開兵力に差があり、国境付近の会戦にはリスクがありすぎる。政治からくる戦略の制約を戦術で補う。大抵の場合はすぐに破たんするこの難し難題に諸葛亮、鳳統はほぼ成功する。基本方針は焦土戦略、都市、城（住民の食糧、生活物資には手を付けずに、焦土作戦の場合すべての物資を持ち去るのが基本とされる。また魏軍に略奪されることも心配していない。劉備の曹操に対する信頼、覇者にたいする問いかけ、逆に略奪があった場合、曹操の覇者の資格を失い、住民の反乱が起き、蜀の政略、戦略は完成する。）に籠城せず、蜀の狭隘な道をつかった伏撃、絶え間ない夜襲、中規模兵力会戦による打撃を与え成都に敵が辿りついた時には、損害を受け、疲労のたまった敵を全兵力にて駆逐する。さらに呉の将兵が合流し、兵数、率いる将が増え戦術の幅が広がった。ただし指揮系統の一本化、呉、蜀の連携等の問題があったが、問題なく魏の侵攻に対応する。ただ一点、一人の将の配置を除けば

魏側も蜀の基本戦略を読んでいたが、後手にまわり蜀の動きに対応する形に終始する。本来であれば相手兵力の吸引を目的とした別働隊を漢中に派遣したりすると思うが、戦略の方針転換によりそこまでの準備、時間がなかったこと、また魏軍首脳陣がこの戦いを覇王、覇者の戦いと位置づけたことも大きい。このことは曹操の「策を弄していい戦、策ろしてはいけない戦」郭嘉の「覇王の品格が問われる」この二つのセリフに要約されている。その結果魏軍５０万は険し道を通ることになる。

成都までに魏軍は何度か交戦するが将兵の奮闘もあり進んでいく、蜀側ももう少し兵力をけずりたかったが成都まで魏を誘き寄せるは戦略のうち、双方ともに許容範囲で成都決戦を迎えた。

成都決戦の参加兵士は魏で４０～４５万、蜀で３０万前後といわれている。

決戦開始はお互いの君主の信念のぶつけ合いから始まり、蜀の素早い展開、奇襲的要素で始まる。蜀の第一陣前軍武将は厳顔、甘寧、周泰、後軍馬岱、魏延、特に前軍３人の攻撃は激しく魏の夏候惇率いる先鋒は戦線の維持がやっとだったが、混乱から立ち直り馬岱、魏延の軍に圧力をかけ、蜀第一陣を引かせる。しかし被害が甚大と判断した魏軍が第二陣と入れ替えようとした瞬間、蜀第二陣前軍馬超隊、孫尚香隊が夏候惇の部隊に襲い掛かる。戦線の維持が難しくなった時に間一髪、魏第二陣、夏侯淵、張遼、楽進、李典、于禁が駆けつけ戦線を盛り返す。しかし蜀第一陣が再度戦線に突入、戦線が再び混とんとする。隙をついて蜀第二陣後軍孫権隊が魏軍本陣目指して突撃を開始、魏の許緒、典韋が応戦し何とか孫権隊を引かせる。これをきっかけに両軍兵を引き再編をし直す。ここまで蜀が主導権を握り優勢にすすめてきたが、蜀の最大の好機だった孫権隊の突撃時に、何故孫権隊のみだったんか、関羽、張飛、趙雲、黄忠など残っていたのに、何故孫権だったのか、関羽、張飛、趙雲に比べれば１段階から２段階おとる武将、（君主の器としては別）関羽、張飛をつかっていれば魏の本陣を落としていたと思われる。

かくして蜀の最初にして最後、最大の好機はさった。しきりなおした魏、蜀互いに死力を尽くした戦い兵数に勝る魏が勝利を収め、曹操と劉備の一騎打ちの末三国同盟が結ばれる。

（後書き）

お読みいたたきありがとうございます。大変読みずらく、内容もないもでしたがいかがでしたでしょうか？一応続編？として三国同盟直後の内政問題を書いてみようと思います。意見等あればコメントをいただければ幸いです。おつきおい頂きありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1885p/

魏の戦いについて

2010年11月28日08時42分発行